「夜の女たち」と戦後ファッション

文・中野香織

国民の多くが貧しい敗戦直後であっても、女性たちの装いの変化が時代を映し出す。

第二次世界大戦中、「贅沢は敵だ」のスローガンのもと、女性は自分でもんぺを作って履いた。歌手の淡谷のり子は、兵士の慰問に行くために化粧してドレスを着ただけで非国民とののしられた。

敗戦後、1952年に独立するまで日本は連合軍の占領下にあり、女性のもんぺは「心の防空服」として着用を促されてはいた。だが、戦中と180度違う役人のことばなど誰が遵守するのか。いち早くもんぺを脱ぎ、洋装をとりいれたのは、「闇の女（夜の女）」と呼ばれる慰安所や娯楽施設で進駐軍の相手をする女性たちだった。アメリカの流行を取り入れた角張った肩、明るい原色、赤い口紅、細い眉、パーマを施した髪にスカーフという、当時としては派手に見える装いである。悪目立ちする洋装は、「闇の女」の特徴ともなる。誤解されて当局に連行されるケースもあったことは、『夜の女たち』にも描かれる。

一方、一般女性にしても、装いを変えて新しい時代に向き合いたい。戦争中にもんぺや着物を補修しながら着ていた女性は、戦争が

1948年に公開された溝口健二監督の「夜の女たち」（1948）をDVDで観た。戦後、すべてを奪われ、どん底に突き落とされながらも必死で闘う女性たちの鬼気迫る生々しさに、打ちのめされた。ミュージカル『夜の女たち』も、原作映画のストーリーをほぼ忠実になぞっている。

終わると、まずそれらをスカートや洋服に作り替えた。「更生服」すなわちリメイクである。

実用一辺倒の装いから楽しむ装いへと、服装に対するマインドも変化した。それに伴い、洋裁学校も急増した。なかでも田中千代は、終戦直後の1945年に洋裁研究所を再開し、戦後の洋裁ブームを導いた。1948年に東京・銀座のキャバレー「美松」で戦後初のファッションショーが開かれていることは、驚くべきスピードだと感じる。

その1年前にあたる1947年、海の向こうで新しい時代の到来を告げるモードが生まれていた。クリスチャン・ディオールが発表した最初のコレクション、「コロール(花冠)」ラインである。細く絞ったウェスト、たっぷりと布地を使ったフレアスカートにより「8」の字を創るラインは、大戦中に封じられていたフェミニンで贅沢な喜びに満ち溢れていた。ふんだんに布地を使える新しい時代が到来したという感慨をこめて、ハーパ

ース・バザーの編集者カーメル・スノウは、これを「ニュールック」と呼んだ。最先端ルックとして日本で紹介され始めるのが1948年。『夜の女たち』に歌われる「ニュールック」はまさしくこれで、「ニュールック」とは過去と決別した新時代の象徴、豊かさと希望のシンボルなのである。

とはいえ、ピカピカのニュールックは、両刃の剣である。自信と勇気がわいてくると同時に、服がもたらす高揚感で目の前の危険な現実も見えなくなる。久美子がまさにこの罠に落ちる。開放のシンボルが身ぐるみはぎとられ、「借り物のお仕着せ」で闇に立つやるせなさときたら。

戦後の数年間、日本の洋装は進んだとしても「借り物のお仕着せ」だったのかもしれない。戦後ファッションが本格的に始まるのは、1951年である。この年、森英恵が新宿に洋装店を開く。米軍大尉夫人の服の採寸のために夫人が脱いだ服を手に取った森は、カルチャーショックを受けるのだ。「服が丸い」と。洋服は立体であることを知った森は、立体裁断への独学の挑戦を始め、やがてニューヨークで「マダム・バタフライ」と

呼ばれて世界的に有名なファッションデザイナーとしての地位を築く。

戦後の混乱期を、女たちは生き抜いた。「夜の女」であれ洋裁師であれデザイナーであれ、置かれた状況を闘い抜いた。以後、70年以上経ち、物質的には「豊か」にはなった。

しかし、『夜の女たち』を見て思う。これは戦後日本、国によっていやおうなく底辺の闘いを強いられた女性たちの物語でありながら、現代日本の話でもあるのではないか、と。社会から切り捨てられ、絶望の淵に叩き落とされ、その日を生き延びる闘いをせざるをえない「弱者」が、今日も苦しんでいる。弱者をいじめるのは弱者という救いのない構造も、背景への理解もないまま正論をふりかざすご立派な「文化人」の存在も、「復讐」の覚悟を抱く者の登場も、いまだに変わらない。なにひとつ日本は変わっていないのではないか。だからこそ、今日、ミュージカルとしてこの物語を問う意義は大きい。

すさまじい物語の最後に、一筋の光がさす。どんな状況でも立ち上がる女性の底力に身震いし、腹を決めて一歩踏み出せと背中を押される思いがする。

■中野香織（なかの・かおり）独立研究者／作家。ラグジュアリー領域を中心に著述、講演、コンサルティング。経産省ファッション未来委員会委員。著書『新・ラグジュアリー 文化が生み出す経済10の講義』（安西洋之氏との共著）、『イノベーター』で読むアパレル全史』、『ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史』他多数。東京大学大学院修了、英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授、昭和女子大学客員教授を歴任。
HP：www.kaori-nakano.com Instagram: kaori.nakano Twitter: kaorimodel